

タッシー、ありがとう

タッシー、  
ありがとう

敦賀市立敦賀西小学校

五年  
西 森 海 音  
にし もり み おん



各務原市立蘇原第一小学校

六年  
長 瀬 美 緒  
なが せ み お

石 田 奈 月  
いし だ な つ

村 山 さ くら  
むら やま さ くら

矢 野 の も と こ  
や の も と こ

田 中 静 香  
た なか しず か

私は、海に來ています。

私の名前は、水川<sup>みずかわ</sup>海<sup>うみ</sup>といいます。今年の春、となり町から転校してきました。

新しい學校に來て一ヶ月がたったけれど、いまだに友達がいません。何を話せばいいのか分からず、だれともしやべれません。學校から帰ると、いつも近くの浜邊に行きます。海を見ていると落ち着くし、昔住んでいた町のことや友達のことが思い出せるんです。

昔住んでいたのは港町で、いつも海に行つて親友の真菜<sup>まな</sup>ちゃんと遊んでいました。私のおじいちゃんは漁師で、よく船で海に連れて行つてくれました。でも、そのおじいちゃんが死んで、友達とも会えなくて、最近とても悲しいことばかりです。

「真菜ちゃんに会いたいなあ」

「きつとまた会えるよ」

という声が、どこからか聞こえてきました。でも、周りにはだれもいません。

「今の声、何だったのかな」

そう考えているうちに、五時のチャイムがなりました。もう家に帰らなくてはいけない時間です。

私は、家に帰る間も、さっきの声を考えていました。

「ただいまあ」

「海、おかえり」

私は、いつも帰ると必ず、おじいちゃんに今日あったことを話します。お母さんに言えないことも言えるからです。今日海であったことも話しました。実はお母さんには、まだ友達がいらないことを言っていません。心配をかけたくないので、海に行っていることも言っていないんです。でも、おじいちゃんには話せるんです。おじいちゃんに話すとすっきりするんです。ご飯を食べて、いつ

も通りの一日が終わりました。

次の日学校に行っても、友達はできませんでした。帰りにまた海に行って昨日のことを考えていると、またあの声が聞こえてきました。

「もつと海に近づいて、海ちゃん」

「ねえ、だれなの」

と言った瞬間、海の中から何かが出てきました。

「初めまして、海ちゃん。ぼくは、タツノオトシゴのタツシーだよ。よろしくね」

「きゃー、びっくりした」

「ごめんね。おどろかせちゃって」

「だいじょうぶだよ。ねえタツシー、何で私の名前を知ってるの」

「海ちゃんが一ヶ月前からよくここにきて、海に相談してたでしょ。ぼくここに住んでるから、その相談聞こえてたんだ」

「何で私、魚の話す言葉が分かるんだろ」

「そんなの決まってるよ。海ちゃんは佑時さんゆうじの孫だもん」

「おじいちゃんのこと知ってるの」

「もちろん。佑時さんは、ぼくの命の恩人だもの」と、タッシーは話し始めました。

「ぼくが小さい時、親とはぐれて探していたら、突然大きな嵐が来て、海ちゃんの住んでた町の近くまで流されてしまったんだ。それで死にそうになったところを、佑時さんに助けてもらったんだよ」

「おじいちゃん、私にその話聞かせてくれたよ。でも何で、おじいちゃんは魚と話せるの」

私は不思議に思い、タッシーに聞きました。するとタッシーは、

「ぼくのおじいちゃん、昔からよく海に遊びに来てた佑時さんと友達になって

遊んでたんだったって」

と、答えました。

「でも、魚と話ができるのと、どう関係があるの」

「佑時さんは、海ちゃんと同じでだれよりも海を大事にしていたからさ」

「それじゃあ、お父さんは」

「海ちゃんのお父さんは、海であまり遊ばなかったから、魚の声が聞こえないんだよ」

「そうなんだ」

その時、五時のチャイムがなり、タッシーが言いました。

「ぼくもう、家に帰らなきゃ。海ちゃんバイバイ。また明日」

「タッシー、バイバイ」

私は帰り道、ワクワクしていました。

（早く明日にならないかな）

私にとって、こっちに來て最初の友達です。それも魚の友達ができて、とても楽しいです。

家に帰ると、いつもとちがって鼻歌を歌いながらスキップをして、大きな声であいさつをしました。そんな私を見て、お母さんが不思議そうに、

「海、今日何かいいことあったの」

と聞いたので、私は、

「ううん、何でもないよ」

と、言いました。

私は自分の部屋に入るとすぐ宿題をして、明日の準備をすませました。下に降りて早くご飯を食べて、お風呂に入って八時半に寝ました。でも早すぎてまだ眠れないので、今日あったことを思い出すことにしました。すべて思い出し、明日は何をしようか考えているうちにうとうとし、寝てしまいました。

その夜、夢を見ました。その夢におじいちゃんが出てきました。



おじいちゃんは、

「自分より弱いものをいじめてはだめだよ。絶対に。鳥も、魚も、すべての生き物を」

と、なつかしい声で言いました。

「おじいちゃん、何でそんなことを言うの」

「小さなアリや魚にも命がある。その命をむだにしてはいけないんだよ」

「うん、わかった」

「そう、それでいいんだ」

おじいちゃんが笑いました。私もつられて笑いました。そのあと、おじいちゃんと話しました。するとおじいちゃんが、

「そろそろ行かないと」

と、言いました。

「おじいちゃん、まだ話そうよ」

「もう時間なんだ」

「おじいちゃんー」

と、私はさけびました。白い光が見えたたん、私は夢から覚めました。

（なんだ夢か）

と、思いました。おじいちゃんの言った言葉の意味がよく分かりません。私は眠くなってきた、また寝ました。ぐっすり眠れました。雲がなく、月がきれいに見える夜のことでした。★

次の日、不思議な気分が目が覚めました。学校に行くときも、おじいちゃんの「命をむだにはいけないんだよ」という言葉が、頭の中でぐるぐる回っていました。学校に着いてからもずっと考えていました。すると空から、

「タッシーに聞けばいいと思うよ」

と、おじいちゃんの声が聞こえました。私は思わず、

「おじいちゃん！」

と大きな声でさげんで、立ち上がりました。教室のみんながふり返りました。

「どうしたの。だいじょうぶ？」

みんなが何かを言っていたけれど、私の耳には入りませんでした。私は一日中、（早くタツシーに相談したい！）と思っていました。

やっと放課後になり、急いで海へ飛んで行きました。

「タツシー」

しかし返事がありません。いつもは、浜辺にタツシーが待っているのに、姿が見えません。もう一度大きな声で、

「タツシー！」

と呼びました。すると、

「おいで！」

とおじいちゃんの声が聞こえました。その瞬間、私は白い光——夢の中で見た光——がきらめいているまぶしい海の底にいました。

そこに立っていたのは……おじいちゃんとタッシーでした。二人はニコニコしながら、

「白い光が見えるだろう」

と、向こうを指さしました。私は、あまりのまぶしさに何が何だかよくわからなかったけれど、夢で見た白い光とふんいきをはつきりと感じていました。二人は、ぼう然と立ちつくしている私の背中をそっと押しました。

気がつくと、私はキラキラと光り輝く、透明なシャボン玉のようなものの中にいました。タッシーが、これは、自分が一番会いたい友達に会えるという「フレンド・バルーン」略して『フレバル』というものだを教えてくれました。おじいちゃんは私に、

「海、行っておいで。一番大切な友達のところ……」  
と言って、すうーっと消えていきました。

タッシーが、

「よし、会いに行こう！」

「誰に？」

「それは、決まっているだろ。海ちゃんが決めることだけどね」

「真菜ちゃんのことだよね！」

「じゃあワープするよ。つかまって！」

すると、白い光が現れて、私は思わず目を閉じました。

気がつくと、私は真菜ちゃんの部屋の中に立っていました。タツシーの姿はなぜかありません。真菜ちゃんが部屋の中に入ってきました。真菜ちゃんはびつくりして、私の顔をじっと見ていました。しばらくすると気が付いたようで、

「海ちゃん？」

と言つて、もう一度私の顔をじっと見ました。私は思わず、

「真菜ちゃん、会いたかった！ だから来たんだよ」

と言つて、にっこり笑いました。真菜ちゃんも、

「私も会いたかったよ」

とうれしそうに言いました。それから、私たちは昔の思い出や今の学校のことなど、たくさんのお話をしました。そして、私は今の学校で友達ができないことを真菜ちゃんに話しました。少し考えてから真菜ちゃんが、

「勇気を出して、話しかけてみたら？ きっと仲良くなつて、いっしょに遊べるようになるよ。海ちゃんならだいじょうぶだよ」

とアドバイスをくれました。私は、

「ありがとう。一度やってみる。やっぱり真菜ちゃんに話してよかった」

と言いました。真菜ちゃんは、お母さんに呼ばれて、部屋を出て行きました。

私もそろそろ帰らなくてはと思い、

「タッシー！」

と呼びました。また白い光に包まれて、『フレバル』に乗って、あつという間に、自分の部屋にもどっていました。

夜になって、今日の出来事をもう一度思い返しながら眠りにつこうとしたとき、また白い光を見たような気がしました。

（何だろう？ おじいちゃんとタッシーのメッセージかな……？）  
と思いつつも、ぐっすり眠ってしまいました。

次の日、私は明るい気持ちで学校へ行きました。真菜ちゃんのアドバイスで勇気が出たので、大きな声で「おはよう！」と言いつつ、教室に入りました。

すると、ロッカーの上に置いてある水そうの中で、赤い熱帯魚が苦しそうに泳いでいました。私は、おじいちゃんの（命をむだにしたいけないんだよ）という言葉思い出して、熱帯魚を助けてやりたいと思いました。でも、どうしていいかわからなくてうろろうしていると、生き物係の女の子が二人、

「どうしたの？」

と聞いてきました。私は、

「この赤い熱帯魚が苦しそうでしょ。なんとかしたいけれど、どうしていいの

かわからなくて……」

と、水そうの熱帯魚を指さしました。二人は、

「本当だ。海ちゃん、よく気づいてくれたね。この熱帯魚を別の水そうに移して、手当てをしなくては。海ちゃんも手伝ってね」

と言いました。それからずっと、先生に相談しながら、三人でいっしょうけんめいに手当てをしました。

一週間後には、赤い熱帯魚は元気に泳ぐようになりました。毎日世話をしていたので、えさをやると、ひらひらと泳いでくるようになり、すごくうれしくなりました。二人は、熱帯魚についていろいろなことを私に教えてくれました。

(これも、おじいちゃんとタッシーのおかげだ)

と思いました。そして、友達ができたことをタッシーに伝えたくて、学校の帰りに新しい友達と一緒に海へ寄りました。

「タッシー」



と呼んでみましたが、タッシーは出てきません。何度呼んでも姿を見せませんでした。私には友達ができたから、タッシーは友達のできない別の子を助けに行ったのかもしれない。夕べ眠る前に見た白い光は、

「海ちゃん、もうだいじょうぶだよね。これからは、たくさんの友達と楽しく過ごしてね。そして、命を大切にしてね」

というおじいちゃんとタッシーのメッセージだったのだと思いました。

「タッシー、ありがとう」